



Emergency Watch

発行：神戸大学大学院医学研究科小児科 こども急性疾患学部門

神戸こども初期急病センター



2012年5月受診者数：2619人

訴え

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

1. 発熱 : 1394人 (1081人)
2. 咳 : 946人 (235人)
3. 鼻汁 : 801人 (15人)
4. 嘔吐 : 701人 (385人)
5. 頭痛 : 469人 (96人)

疾患頻度

1. 急性上気道炎・咽頭炎 : 867人
2. 感染性胃腸炎 : 649人
3. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 225人
4. 気管支炎・肺炎 : 157人
5. じんま疹 : 113人



今月のワンポイント！

日差しも強く初夏を思わせる季節となりました。5月はゴールデンウィークがありましたが、神戸こども初期急病センターへの受診患者さんの数は、2619人と4月に比べ横ばいでした。疾患別頻度は、4月と同様で、急性上気道炎・咽頭炎が最も多く、次いで感染性胃腸炎、気管支喘息・喘息様気管支炎の順でした。1～3月にかけて猛威をふるっていたインフルエンザも、4月は177人から5月では8人とほとんどみられなくなってきました。また、全例B型で、感染症情報センターの報告によると、全国的にも同様の傾向でした。

さて、これからじめじめとした梅雨の時期に入っていきますが、日ごろの感染症以外にも気をつけなければいけない病気がいくつかあります。ひとつは、熱中症です。熱中症は、梅雨明けなどの急に暑くなり、体が暑さに慣れていないときに多く発生する傾向があります。梅雨空けの急な気温の上昇から上手に発汗できるようになるには暑さへの慣れが必要です。暑さに慣れるまでは短時間で軽めの運動から始め、徐々に馴らしていきましょう。本格的に暑くなる前から外遊びを徐々に増やすようにして、子どもの暑さに強い体づくりを行いましょう。また、こどもは汗をかきやすく脱水になりやすいので、日ごろから水分をこまめにとるように努めましょう。

もうひとつは、食中毒です。高温多湿の日本では、梅雨時期からじわじわ増え始めます。給食や仕出し屋の弁当で発生というケースも多いですが、意外と家庭の中でも起こります。こどもは、症状が重くなることもあるので注意が必要です。家庭でできる予防の三原則は「付けない」、「増やさない」、「殺す」です。食品はできるだけ新鮮なものを購入し、保存にも気をつけましょう。中心部までしっかりと加熱し、室温に長時間放置するのはやめましょう。手指にはたくさんの細菌が付着しているので、調理前や食事前には必ず手洗いを。また、1日に何度も下痢を繰り返す、下痢だけではなく、嘔吐、発熱、血便などがあれば早めに病院でみてもらいましょう。こどもの場合は、下痢やおう吐から脱水を起こしやすいので、水分がとれなかったり、おしっこが減ってきたりする場合も、受診しましょう。

